

「ああ、な、奈緒さあん……」

「い、いい？ 入れるよ、入れちゃうよ！」

すぐにでも打ちこんでしまいたい情欲を必死にこらえながら、静かに雁首を受け入れる。ヌルッとお互いの体液にぬめり、括れた部分までが埋没する。

「どう？ ねえ、先つぼが、ほらあ、あたしのオマ×コに入っちゃったよお！」

背をのけ反らせ、昇の足もとの左右に手を置き、男と女の性器のつながりを見せつける。

軽く腰を上下させ、出入りを繰り返す様子を存分に鑑賞させる。

「ああ、ほ、本当だ！ は、入ってるよお！ 奈緒さんのなかに入ってる！」

視覚さえも刺激され、肉棒はひととき大きく膨れあがる。

「ほら、もつと……ふうああつ！」

背を反らせたままのポーズで、腰をおろしてゆく。

膣の粘膜が、波を打った襞肉が血潮の滾った肉棒にこすられる。若くたくましい男根がふしだらな牝肉に罰を与える。硬いだけのシリコンとは違う生身の弾力がたまらなく心地よい。

背を起こして前屈みになり、少年の薄い胸板へ両手をつく。



「ふう……お、奥まで、入れたいでしょう？　ねっ、そうよね？」

「ああ、は、はい……い、入れたいよお」

初めての女の味にうっとりとしとろけた瞳を向け、少年は小さく何度もうなずいた。

「い、いくわよお、ほらあ……おおん！」

打ちおろしたと同時に、昇もこれ以上我慢ができないとばかりに、思いきり腰を突きあげてきた。深々と、剛直の根元まで一気に埋まってしまう。

膣を貫き、先端は子宮にまで達している。

「んう、ああ……ぜ、全部う……ねえ、入っちゃったよお」

股を裂き、海草のように貼りついた繊毛をかき分けて、恥骨と恥骨が密着しているさまを見せつける。ゆっくりと腰を上下させれば、まくれた肉ビラの狭間から白い分泌に濡れ光った肉根が露呈してくる。

「ううああ、すごい、奈緒さんので、ヌルヌルに、はあう！」

亀頭の括^{くび}れが現われた瞬間に、ふたたび腰を落とす。

生肉をまな板に叩きつけたような卑猥^{ひわい}な音が室内にこだまする。

少しだけ膣の圧迫を強めながら、腰をあげ、勢いをつけて打ちおろす。

「ううあ！」

奇妙な喘ぎとともに少年が悶える。つらそうに顔をしかめ、牝肉の凌辱をこらえている。

さらに肉を絞り、腰をあげる。カリの部分で小刻みに上下させれば、昇はとめてくれとばかりに両手で腰を押さえようとする。

「ほらあ、ほら、ほらっ！ ど、どう？ いい？ んうふう、いいんでしょう？」

腰の動きを休めることなく、上半身を前に倒し、豊満な乳房を胸板に押しつける。男の本能なのか、昇は両脇から乳房を絞りあげた。

「そう、そうよ！ 揉んでえ……強くう、もっと絞ってえ！」

手のひらからこぼれ落ちるほどのたわわな肉の実を、根元から何度も絞りあげ、最後に乳首を指でつねる。

必死に首を持ちあげ、しこった乳首に舌を伸ばす。指先をこすり合わせるように、肉芽が悲鳴をあげるほど強くねじりあげ、無理矢理に突起させて吸いつく。

前歯で甘噛みされれば、背筋に愉悦の電気が走る。

「んふう！ いいよお、ああ！」

卑猥に上下するヒップ。情欲のまま肉棒をしゃぶる膣肉。ストロークは際限なく速まり、淫汁に湿った音が部屋中に響き渡る。